

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 23年 8月26日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 教務補佐員

氏 名 本 郷 儀 人

助成の種類	平成23年度・国際研究集会発表助成		
研究集会名	Behavior 2011: Joint meeting of the International Ethological Conference and the Animal Behavior Society 国際動物行動学会議および動物行動学会合同大会		
発表題目	What overcomes bodysize adversity?		
開催場所	Indiana University Bloomington		
渡航期間	平成23年7月24日 ~ 平成23年7月29日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空料(往復)218,900円に充当	
		(航空料のうち18,900円と他宿泊料などは自己負担)	

成果の概要 / 本郷 儀人

概 要

筆者は、京都大学教育研究振興財団平成 23 年度国際研究集会派遣助成第 2 期採択者として 2011 年 7 月 25 日から 30 日にかけてアメリカ合衆国・ブルーミントン・インディアナ大学ブルーミントン校で開催された第 32 回国際動物行動学会議 (IEC) 及び第 48 回動物行動学会 (ABS) の合同会議に参加、2 種のクワガタムシの種間での闘争行動について発表の機会を得た。

本大会は通常の国際行動学会議に、米国と英国の動物行動学会が合同で開催し「Behavior 2011」と銘打った、参加国数 20 ヶ国以上であり参加者総数は 1000 名程にのぼる大規模な国際研究会議となった。IEC 国際行動学会議には参加したことが以前にあったが、筆者自身の研究の専門であるアメリカの研究者が多く参加する ABS 動物行動学会にはいずれ参加したいと思っていたが、まだ参加したことがなかったのである意味幸運であった。しかしながら、筆者は、日本時間 7 月 30 日に開催される進化学会のシンポジウムに参加しなければならなかったため、学会開催期間の半分で帰国するという非常にタイトなスケジュールを組まざるを得ず (開催地では 25・26・27 日の 2 泊 3 日)、多くの興味ある発表を聞き逃したのは非常に残念である。また、甲虫研究者で、友人でもある Arimin Moczek 博士と、5 年ぶりの再会の約束をしていたにもかかわらず、時間の都合上結局果たせずに終わったことも誠に残念である。次回からは、時間に余裕を持たせて日程を組みたい。

研究発表

筆者は、7 月 25 日から 27 日までのポスター A、Sexual Selection のセッションにて発表。以下に発表内容の概要を示す。

ミヤマクワガタとノコギリクワガタは日本で同所的によく見られる普通種であるが、通常ミヤマクワガタの方が体サイズは大きい。一般に、種間においても種内においても、闘争では体サイズの大きな個体が有利になる。つまりミヤマクワガタの方が闘争には強いと予測できる。そこでこの 2 種の詳細な闘争行動を調べた。ところが、その予測に反し、ミヤマクワガタが闘争に有利とは言えなかった。闘争時における大顎の使い方に 2 パターンあり、相手の上側 (背中側) から挟み込んで投げ飛ばす方法と、相手の下側 (腹側) から挟み込んで投げ飛ばす方法があり、ミヤマクワガタは後者のみを、ノコギリクワガタは両方を用いることが分かった。この使い分けの能力の有無により、2 種間の闘争の優劣が決まる。つまり、ノコギリクワガタはミヤマクワガタよりも体サイズが小さいにもかかわらず、相手の下方に潜り込んで挟み込むという行動ができるため、闘争を有利に進めることが可能なのである。このように本研究は、行動学における通常概念を覆し、詳細な行動の観察の重要性を再認識させる結果となった。

発表時間中には、何名かの方から鋭い質問や有益なコメントをいただいた。特に、専門外の方からの質問は、逆に非常に身になることを痛感した。Gordon Burghardt 博士とは帰国後も電子メールにて議論するなど、様々なご助言を頂いたので感謝したい。ただ、ポスター発表は口頭発表に比べて扱いが少し悪い気がしたので(あまり人が来ない・特に国際会議では)、次に発表の機会を得られれば口頭発表を選択したいと思う。

その他(アメリカの自然について)

アメリカには初めて渡航したが、インディアナ大学の構内には、リスを2種(シマリス他)、鳥類を5種(カージナル他)、確認することができた。筆者は昆虫を対象に研究を行っているため、ここまで身近に、特に哺乳類や鳥類を観察できるとは、日本では考えられないためにとっても驚いた。が、逆に昆虫類はセミを1種類確認しただけであった。海外の研究者に哺乳類や鳥類を専門にしている人物が多いのも頷けた。